

このあたりを詠んだ古歌

このあたりは、古代から交通の要衝、ここにやって来た、ここを通過した、あるいはここで宿泊した歌人たちも少なくない。また、多くの和歌に詠まれてもいる。和歌そして近代短歌ゆかりの地。

◎大伴家持 後鳥羽院 藤原定家 源頼政 三条西実隆

◎難波堀江（堀江川） わたのべ 大江の岸 高津の宮

「堀江の月」難波堀江の蛙

◎大江御厨 源頼光―渡辺綱 渡辺―遠藤（遠藤盛遠Ⅱ文覚） 熊川

大江岸 おほえのきし 古歌の心を按ずるに、天満橋南爪 みなみづめ 今の八軒家の浜なり。是より南の方一堆の丘山にして、西北は大江なり。大坂旧図を見るに、大江橋渡辺橋は一橋二名なり。八軒家といふは、旅舎八家 はたご づらなりて、京師の上下、夜となく昼となく、入船出船ありて喧し。此地都て夏の夜に蚊なし。風土の奇といふべし。（このあと三首の和歌を引く） 秋里籬島『摂津名所図会』巻四

上古図中の大江の岸の地を閲るに、南北長く連り、南は住吉の辺より、北は都賀野の辺に至る。これ上古の海岸なり。 著者不明『浪華百事談』巻之一

道すがら面影につとそひて、胸もふたがりながら、御舟に乗りたまひぬ。日長きころなれば、追風さへそひて、まだ申のときばかりに、かの浦に着きたまひぬ。かりそめの道にても、かかる旅をならひたまはぬ心地に、心細さもかしさもめづらかなり。大江殿と言ひける所は、いたう荒れて、松ばかりぞしるしなる。 『源氏物語』須磨

大江殿：斎宮交代の折の帰京のときの旅宿、といわれている。

をほえどの 大江殿ナリ。ワタノベノ橋ノ東ノキシニ、ムカシ駅楼アリケリ。今モ楼ノキシトイフ。 『類字源語抄』

つ のくににくだりてはべりけるに旅宿遠望の心をよみ侍りける 良暹法師

わたのべやおほえのきしにやどりしてくもゐにみゆるいこま山かな 『後拾遺集』巻九

（五月雨）

隆源

さみだれは日数つもれどわたのべの大江のきしはひたらざりけり 『堀河百首』

（五月雨を）

源長俊朝臣

ふねよばふこゑもおよばずなりにけりおほえのきしのさみだれのころ 『万代集』巻三

おほえのきし 大江、摂津

堀川院御時百首

隆源法師

五月雨は日かずふれどもわたのべのおほえのきしはひたらざりけり

後法性寺入道関白百首

俊恵法師

五月雨はおほえのきしに水こえてこやのきばに舟つなぎけり 『夫木抄』巻二十六

頼政朝臣九月ばかりにしほゆあみてわたのべにはべりしに、つかはしける
いづくをかながめてすぐるこのころはいこまのたけもきりこめつらん

河上霧

ほどもなくきりこめてけりこぎいでつるおほえの岸やいづこなるらん

俊恵『林葉集』第三

(名所)

舟とむる大江の岸も暮れはてていこまの山はいづくともなし

冷泉為相『為相卿千首』

(駅路雪)

わたのべや朝氣の川にうかぶなり大江の松の雪の一村

源氏物語

河風はあたたかならず渡辺や岸に大江の松のしら雪

正徹『草根集』

名所松

正徳の弟子

渡辺や大江殿とて岸たかく今もしるしをのこす松かな

正広『松下集』長享二年七月一日 中島

(五月雨)

わたのべのおほえの岸やくづるらん生駒のたけの五月雨の比

木下長嘯子『挙白集』

能因法師

能因法師

(大永四年五月)二日、堺をたちてすみよしにまうでて、(中略)渡辺より能勢源五郎、奥馬などむかへにをこせて、ここより船にのりうつりて漕ぎ出るほど、能因法師が「雲ゐにみゆる伊駒山」もおもひいでられ侍り。樓の岸などいふもここといふ所なり。大江殿のあととて今も松のみどりにみえ侍り。

名にたてるその世のままか尋ねばや大江の松のしる人もがな

三条西実隆『高野参詣日記』

*わが宿のこずゑの夏になるときはいこまの山ぞ見えなりゆく『後拾遺集』卷三

水郷月

卷三

ふけゆけば月すみわたりわたのべの大江のきしに秋の風吹く

木下幸文『亮々遺稿』

亮々

能因法師

2 堀江は大川か

ところで、『万葉集』で歌われ、平安時代以降、歌枕になって詠みつがれた堀江は、摂津国のどこにあったのか。現在、大阪市西区の地名に北堀江・南堀江がある。両者ともに江戸時代にさかのぼって存在が確認できる地名である。十八世紀末に刊行された『摂津名所図会』の巻四には、

長堀川西横堀より西を北堀江といふ。堀江川より道頓堀までを南堀江といふ。

と記されている。「長堀川」の次に「より南」とあってしかるべきところだが、その点はともかく、何となく歌枕の堀江や堀江の川と関係があるような感じのする地名である。しかしながら、名所図会のいう堀江川も、北堀江・南堀江(堀江川の北、堀江川の南の意であろう)も、歌枕の堀江や堀江の川と直接的な関係はない。名所図会のいう「堀江川」は、江戸時代の元禄十一年(一六九八)に掘られた川である。掘った川だから「堀江川」と呼ぶのだが、掘った川というだけなら別に「堀川」と呼んでもいいし、「何々堀川」「何々堀」と呼んでもいい。それなのに「堀江川」と名づけたところには、難波に昔、堀江があったという知識が働きかけているのだろう。『摂津名所図会』の著者も、

こゝの堀江は旧号あるによつて号なまくるものならん。

と想像している。また、万葉時代にあった堀江の名称を残す川が難波のどこかにあるとすれば、新しく掘った川を「堀江川」などと名づけないであろうから、元禄年間に「堀江川」と名づけられたことが、別の場所に堀江の名が残っていなかった事実を語っている。

それにしても紛らわしい名前を付けたものである。地名に惑わされ、万葉時代の堀江を現在の西区の堀江と考える人が、江戸時代からいたらしく、本居宣長も『古事記伝』のなかで、

さて今ノ世大坂に、南堀江北堀江とて堀のあるは、古への堀江には非ず。思と混ふべからず。

といている。なお、北堀江と南堀江のあいだを流れていた堀江川は、昭和三十年代に埋め立てられ、

現在は存在しない。いや、堀江川だけではなく、長堀川も西横堀川も昭和四十年代までに埋めたてられてしまった。

『万葉集』の歌に詠まれ、のちに歌枕になった堀江は、『日本書紀』の仁徳天皇十一年十月の条によれば、南から北へ流れる川水の一部を途中で西に流して海にそそがせるため、高津の宮の北を掘って造った川である。『古事記』の仁徳天皇記にも「難波の堀江を掘りて海に通はし」とある。西行が、「五月雨」の題で詠んだ歌、

水わくるなには堀江のなかりせばいかにかせまし五月雨のころ（『山家集』）

において「水わくる」といつているのは、川水を北と西に分ける意で、『日本書紀』の記事を踏まえていると思われる。堀江を開削したのは、海から舟を導き入れること以上に、川の水を速やかに海へ流すことが大きな目的であった。ただし現実には、航路としても盛んに利用された。だからこそ、万葉歌で舟がよく歌われ、後世の歌人たちにも、舟が行き来する川というふうに捉えられもしたのである。掘られたのが事実であっても、本当に仁徳天皇の時代に掘られたかどうかはわからないが、そのように信じられていた。

この堀江は、『摂津名所図会』巻四に、

今の大川筋を堀江川といふならんか。

とあるように、江戸時代以来の通説では、上町台地の北端を東から西へ流れる大川（旧淀川）だと考えられていた。本居宣長も大川説であった。曖昧な書き方であるし、本文上の問題も少しあるが、鎌倉期の『色葉和難集』巻七にも、

ほりえは、つにくにのよど河のほり江なり。

と書かれている。『扶桑略記』や『帝王編年記』の仁徳天皇の条に、山崎河の流れが海に通じているのが堀江だ、とあるのも、山崎河が淀川の別名だとすると旧淀川を指していることになるだろう。そして、難波宮址発掘の功労者、故山根徳太郎氏の著『難波王朝』（昭和44年4月、学生社）に、旧来の通説の正しさが詳述されている。

要するに、今、大阪市内の天満橋の下を流れている大川が、古代の難波堀江であった。（中略）天満橋のあたりは、もともと、大阪平野に袋状を成して湾入する海の入河口であったようである。その湾は次第に湖水化、あるいは低湿地化し、上町台地の北にも土砂が堆積していった。陸地が広がる一方、袋の口にあたる部分が狭くなってきたのである。そうすると、大雨がふれば、大和や河内、さらに山城から流れてくる水が、上町台地と生駒山地とのあいだの土地に停滞し、しばしば洪水を引き起こす。それで、土砂の堆積した箇所を開削して海までの水路を造り、上町台地の東側の水が速やかに大阪湾に流れるようにしたのである。水路は、河内方面と海とを繋ぐ航路としても利用された。今は、海が遠くなっているが、奈良時代には、現在の御堂筋の西あたりから海であったという。

『続日本紀』に出てくる「難波江口」は、難波堀江の出入り口をいい、その位置について千田稔氏は、玉江橋の北岸ではないかと考証している（『埋れた港』昭和49年5月、学生社）。そうだとすれば、現在の天満橋から玉江橋あたりまでの三キロくらいの区間が堀江ということになる。現在、大川は堂島川と土佐堀川の二つに分かれ、二本の川に挟まれた地が中之島になっているが、中之島は古代には存在しなかったらしい。